

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和元年八月三十一日(土曜日)午後五時開演

演目解説 西村 聡(金沢大学人間社会研究域教授)

狂言 膏薬煉(こうやくねり)

鎌倉と上方でそれぞれ大名人を自称する膏薬煉の二人が、互いに相手の噂を聞き、腕競べを思い立って街道で行き会います。名馬生食をつなぎ寄せた鎌倉の馬吸膏薬、八千人引きの大石を持ち上げた上方の石吸膏薬、各々膏薬司を頂戴した先祖の名誉を語り、片や海に生える竹の子、対して空を飛ぶどぶ亀をはじめとする家伝の薬種を明かす、という途方もない自慢の果てに、鼻に膏薬を塗り、吸い寄せて、実際の効き目を試し合います。

能 須磨源氏(すまげんじ)

日向の国宮崎の社官藤原興範の一行(ワキ・ワキツレ)が伊勢参宮の旅の途中、摂津の国須磨の浦に着き、光源氏ゆかりの若木の桜を見物するつもりです。そこへ須磨の浦で魚を釣り、塩を焼き、塩木を運んで憂き世を渡る老人(前シテ)が現れ、山仕事の折々に若木の桜に楳や花の枝を手向けると述べて花を眺める風情です。興範が老人の眺める花の由緒を尋ねると、老人は須磨の浦は光源氏ゆかりの名所が多い、無風流な田舎者と見下しなされるなど応じます。老人は源氏物語の巻名を織り込んで光源氏の閲歴を語り、光源氏は昔はこのあたりに、また今は都率天に住むから、月光のもとこの海に影向するであろう、奇特をお待ちなさいと言い置いて雲に隠れます(中人)。興範はさらに奇特を拝もうと海辺に仮寝して心を澄ませるうちに妙なる音楽が聞こえてきます。これも源氏物語紅葉賀に描かれた、光源氏の舞い姿で名高い青海波の楽です。今は兜率天に住むいにしへの光源氏が、月に詠じ波の楽に惹かれて天下りました。青暗い夜の海に雲間から一条の月光がさして、青鈍色の狩衣をまとった童男(後シテ)が現れ、夜すがら須磨の嵐に袂をひるがえして舞います。光源氏若き日の挫折と受け取られがちな須磨暮らしは、衆生を助けるために天人が降下した姿であると、光源氏の尊霊は興範に告げて奇特を示します。(西村 聡)

前シテ(老翁) 尉髪をつけ、笑尉又は朝倉尉或いは三光尉の面をかける。無地熨斗目を着附に

着、上に水衣を着て、腰帯をしめる。(持物、杖)

後シテ(光源氏)

初冠をいただき、覆懸をつけ、色鉢巻をしめ、中将の面をかける。縫箔を着附に着、込大口をはき、指貫をはく。上に単狩衣を着て、腰帯をしめる。(持物、扇)

(午後七時頃終了予定)